

人と議論を結びつける学会へ

船山仲他

(神戸市外国語大学名誉教授)

1. “中小”学会と“大”学会

会員数の規模から、学会を“中小”学会と“大”学会に分けてみると、学会として目指すことの違いも見えてくるのではないかと。 “大”学会は「〇〇学」と呼ばれるような学問分野の主要テーマを網羅しようとするので、大会の規模は大きくなっても、新しい側面を視野に入れながらの実質的な討議は限られる傾向がみられる。結局、小さなグループで関心事を共有する研究者が集まる方が効率的、生産的であると思える。その点で、小規模な学会の方が個人の関心を前面に出せ、将来的な潜在性も含めて、研究面でのリーダーが育つ可能性が大きいように思える。大きな括りの学会は“時のテーマ”に振り回されるところがあり、独自の考え方を提起する機会は少ないのではないかと。

日本メディア英語学会も日本通訳翻訳学会も規模はそれ程大きくはないが、焦点を絞った活動をすれば面白い成果が出せるのではないかと。

2. 日本時事英語学会～日本メディア英語学会

日本時事英語学会が設立されたのは1959年なので、伝統のある学会と言えるだろう。私が加入したのは1993年である。主として関西支部の活動に参加したが、英字新聞の練達英文ライターや放送局の国際部長、貿易会社のビジネス・パーソンなど、実社会で英語を使っている会員が多かった。大学関係者も入っていたが、控えめな人が多かったような気がする。英語を研究している人よりも、英語を使って仕事をしている人の方が元気だった。私は「同時通訳論研究分科会」を立ち上げ、自分なりの活動を続けた。同時通訳を無理やり時事英語の一種にしてしまったが、小規模学会は人間関係で無理が効くところもある。

2011年に日本メディア英語学会に衣替えする前から、CDA(批判的談話分析)を一つの焦点にしてはどうかと、関係会員に勧めていたが、活動は続いているようでうれしく思っている。“メディア”という語の響きで“時事英語”よりも広い範囲の研究者を引き付ける可能性はあると思うが、同時に、「日本メディア英語学会」の目玉をはっきりさせていくことが今後の課題ではないかと。一過性の研究課題の繰り返しで終わるのではなく、萌芽的な研究が育っていく環境づくりに貢献してほしい。

3. 日本通訳学会～日本通訳翻訳学会

いつの頃か、東京で「通訳理論研究会」(世話人:近藤正臣さん、水野的さん、三浦信孝さん)という集まりがあると知り、何かの機会に水野さんをお願いして研究発表をさせてもらった。関西でやっていた「同時通訳論研究分科会」(前掲)に水野さんに御出でいただいたこともある。いずれも

1990年代のことで、2000年に発足した日本通訳学会の露払いをしたような気分である。

日本通訳学会発足以来、大学における通訳関係の授業が増え、会員の多くが大学で教鞭をとるようになり、また、逆に、個人的経験を基に通訳の授業を担当する人たちが学会に参加することも増えたようだ。若手としては、大学院レベルで通訳研究をする院生が当学会で修士論文や博士論文の研究成果を発表するケースも増えたようで、学会としての勢いを感じる。

ただ、通訳研究の理論的基盤はまだ軟弱に見える。コミュニティ通訳などは社会的な側面があり、いろいろな角度からの研究ができる材料を提供してくれるし、通訳教育もいろいろなデータを提供してくれるが、考察を深めるためにはその分野の理論的枠組みをもっと強化する必要があるように思う。